



# 虫たちの声を聴きながら体験活動を

“実を食べにおいで”とアピールするガマズミ



どこか懐かしいアケビ（左上）や、ヤマブドウ（右上）  
ゲンノショウコ（下）も咲き乱れ、野山はにぎやか

秋の七塚原高原は、四季の内一番心穏やかなときです。一歩草原に足を踏み入れると、

草原から森に一歩足を踏み入れると、なんだか厳しい雰囲気が出てきます。「オイ、大きな葉は早く落ちるよ、もう冬芽の準備ができたからおまえたちは邪魔なんだよ」とホオノキがいつているかと思えば、オイ、落ちるのはまだ早いよ、しっかり働いてくれなきゃ実が育たないからな」とクヌギやコナラがハッパをかけている声が聞こえる。「そんなことをいつたって

花がしおれた後には地表に細長い葉を放射状に出しますが、翌春になると葉は枯れてしまいい、秋が近づくと地表には何も生えてきません。つまり、開花期には葉がなく、葉があるときは花がない、という訳



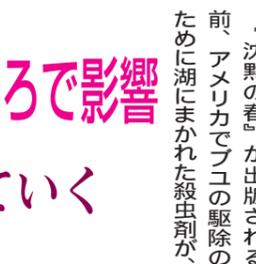
九月の中ごろ、つまり秋の彼岸のころに咲くヒガンバナ。曼珠沙華（まんじゅしゃげ）とも呼ばれ、誰もが馴染み深いその姿は、里の秋を彩る代表的な花の一つと言えるでしょう。生長の仕方は独特で、

私たちがこれからお見合いの季節だからね、お化粧をさせてもらつよ」と、ヤマウルシやカエデたちが紅を塗り始めています。「もうすぐ完熟だからね、小鳥さんたち私の実を食べにおいで」とアピールしているのは、ガマズミさんにウメモドキさんにサルトリイバラさん。

「自然は、沈黙した。うす気味悪い。鳥たちは、どこへ行ってしまったのか。みんな不思議に思い、不吉な予感におびえた。（中略）春が来たが、沈黙の春だった。」



『沈黙の春』が出版される前、アメリカでブユの駆除のために湖にまかれた殺虫剤が、



トンボの仲間を捕らえたアオメアブ

## 食う食われる 思わぬところで影響 化学物質が濃縮されていく

『沈黙の春』が出版される前、アメリカでブユの駆除のために湖にまかれた殺虫剤が、

ブリが大量に死ぬということが起こりました。ブユを殺すのに十分な薄さで広く撒かれたはずの殺虫剤が、プランクトンにとりこまれ、それを食

食う食われるの関係を通じて他の生物とつながっています。生き物は餌として自分の重さの何倍もの量の別の生き物を食べます。食べられる方も何倍もの餌を食べます。このような仕組みによって、分解されにくい化学物質であれば、たとえ初めの濃度が薄くても餌として食べられるうちに濃縮されるのです。

プランクトン、プランクトンを食べる魚、魚を食べる鳥のカイツブリと蓄積し、カイツブリは生きていく生物は、

生き物は他の生き物とかかわりながら生きています。生き物を守るには、生き物のかわりをまもることでもあります。（生物調査課 和田秀次）

## 「死」のイメージと隣り合わせの花 有毒成分は、一方で生薬にも

や土手に植えたとも考えられているようです。というのがその球根にはリコリンという有毒成分が含まれているから

その有毒成分を利用して、モグラやネズミから水田を守るというところ、以前は火葬ではなく土葬が多かったため、虫除けおよび死体が動物によって掘り荒らされるのを防ぐために植えられてきたからで

一方で、毒と薬は表裏一体とはよく言ったもので、石蒜（せきさん）という生薬でもあり、利尿や痰を切る作用も

救飢植物としての利用もあつたようです。しかしながら素人が民間療法として扱ってはあまりにも危険過ぎますので、私たちは観て楽しむことにしましょう。（地域支援課 原竜也）

死にいたることもあるようです。日本には、大陸からの稲作の伝来の際に、土と共に球根が混入してきて広まったといわれていますが、モグラなどの土に穴を掘る小動物を避けるためにあえて持ち込み、畦

墓地を囲むように群生（左）。花単体をみても面白い（上）

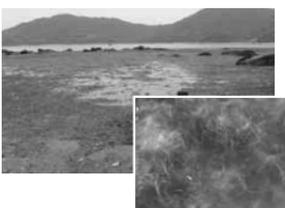


## 生物調査事業

さまざまな人間活動や生活様式の変化により、近年地域の生物が減っています。豊かな自然は私たちの暮らしにとってなくてはならないものです。当協会では、身近な自然を知り、大切な生き物を守るための生物調査事業を行っています。

### 地域の自然を知る

陸上生物・水生生物・海域生物調査



### 大切な生き物を守る

野生動植物保全対策調査



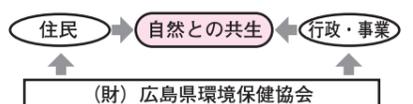
### 失われた自然を取り戻す

自然再生計画立案・実施



### 実施の枠組み

住民や行政・事業者の自然との共生の取組みを生物保全の専門家としてお手伝いします。



問い合わせ：  
財団法人広島県環境保健協会  
企画開発センター業務開発課/生物調査課  
電話：082-293-1517 (FAX) FAX：082-293-8915